イマどき 高校野球

「嫌」「格好いい」声様々

1 丸刈り

高校球児の象徴ともいえる「丸刈り」。しかし、どうして皆丸刈りにするのだろう。

男子部員14人の阿南の小椋柳太監督が丸刈りをやめようと提案したのは、昨年4月。毎年部員不足が深刻となる中、「野球が好きな子が、丸刈りが嫌だからという理由で野球部に入らないのはもったいない」と考え、宣言した。

ただ、大会直前になると、気合を入れるためか、自主的に頭を丸刈りにした部員が相次いだ。「元から野球をやっている子にとっては、丸刈りはあまり抵抗がないのかもしれません」と小椋監督はいう。

木曽青峰の柳瀬元監督は、丸刈りについてどう思うか、部員に提案した。すると、「高校野球は丸刈りじゃなきゃ、格好悪いです」と部員の方が丸刈りをやめることに反対したという。柳瀬監督は「個人的には丸刈りじゃなくても良いと思うが、確かに髪は短い方が帽子の中で蒸れないし、楽」と語る。やはり球児に丸刈りはなじむのかもしれない。

別の理由から、一時的に「丸刈り禁止」とする学校もある。中信のある高校では、公式戦のない冬季の間は、頭髪を伸ばすように勧めている。監督は「高校3年間の中で、髪形や身だしなみを気にする時間も必要。個人的にも、丸刈りでなければいけない理由を合理的に説明できない」という。ただ、春以降は生徒が自主的に髪を短く刈っているという。

部員の頭髪について、部内でルールを設けているのか。朝日新聞長野総局は、長野大会に出場する85チームにアンケートを実施した。すると、部員不足に悩む幾つかの学校では、「丸刈りを理由に入部を拒む生徒が多い」という理由から、頭髪を自由にしていることがわかった。

一方、大半の回答はやはり、「丸刈りにしている」「ルールは定めていないが部員の大半は丸刈り」だった。6月23日に行われた長野大会組み合わせ抽選会の会場でも、髪を伸ばしたチームの主将は数えるほどしかいなかった。

日本高野連と朝日新聞社が5年に1度実施し、6月に発表された高校野球実態調査でも、県高野連加盟で回答した86校のうち、部員の頭髪の扱いについて、「丸刈り」と答えた学校は56校。全体の65・1%を占めた。ただ2013年の前回調査から約10ポイント低かった。反対に、「スポーツ刈りも可」「特に取り決めず、長髪も可」とした回答の合計は33・7%（29校）で、前回より8・7ポイント増加した。

全国3939校の回答では、「丸刈り」とした学校は76・8%で、前回調査より2・6ポイント低かった。

見直す動きがある一方、支持も根強い「丸刈り」。

上田西の原公彦監督は「野球をやることに丸刈りかどうかは関係ない。ただ、丸刈りにすることは、自分が高校野球をしている間は『他のものには惑わされません』という意思表示だと考えています」と話した。

（大野択生）

◇

第100回の大きな節目を迎える高校野球長野大会。「信州夏100回」の第4部として、「追いかけた先に」「イマどき高校野球」の二つの連載（いずれも全5回）を始めます。「追いかけた先に」では、さまざまな環境で夢を追いかける高校球児の姿をお伝えします。「イマどき高校野球」では、これからの野球の在り方のヒントになりそうな、学校や球児たちの工夫や取り組みを取り上げます。

組み合わせ抽選会に参加した各チームの主将のほとんどは丸刈りだった＝6月23日、安曇野スイス村サンモリッツ

■丸刈りをルールにしている学校の主な理由
- 清潔に、お金をかけない
- 野球により集中するため
- 伝統で継続している
- （丸刈りも）高校野球のユニホームの一つと考えるから

■丸刈りをルールにしていない学校の主な理由
- 丸刈りで入部を敬遠する子が多い
- 高校時代に身だしなみに気をつかうことも大切だから
- プレーに支障がなければこだわらない
- 時代の流れを感じたから

（いずれも朝日新聞長野総局が長野大会出場85チームに実施したアンケートの回答から抜粋）

◎ 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

イマどき 高校野球

外部の講師が栄養指導

2 体づくり

球児に食事を指導する「食トレ」を多くの高校野球の指導者が採り入れている。試合に勝つための体づくりだけでなく、引退後の健康のケアを考えたものもある。

4月下旬の午後8時ごろ。練習を終えた北信の強豪・長野商の部員たちが、グラウンド横の部室に次々とやってきた。山盛りの白飯と豚キムチ、漬けもの、みそ汁、フルーツ――。部員たちは、長机に並んだ「夕食」の前に着席し、黙々と、ご飯をかきこむ。おかわりする部員もいた。

長野商ではこの冬、平日の練習後、管理栄養士が考案した献立と1人白飯3合を、30分以内に全員で食べる「食事合宿」を実施。白飯の量を調整しながら、4月まで継続した。運動直後に栄養をとるのが狙いだ。

約60食分を毎日作ったのは、部員の保護者と女子マネジャー。マネジャーは毎日の授業が終わると炊飯器のスイッチを押し、1～2カ月に1回ごとの当番制で保護者4人が大鍋でおかずを作った。部員は後片付けを担った。

元田太郎君（3年）の母、由美子さん(45)は「合宿中は息子の帰宅が早くなった。夜遅くに食べてすぐ寝るよりは、この方が体にもいい。当番は週1回ぐらいだと大変だが、このペースならいい」という。

元々小食だったという五十嵐拓君（2年）は、練習の合間におにぎりの間食を増やし、体重も毎日量るようになった。「仲間と一緒に食べるのは楽しい」。池田剛幸監督は「選手が食事への意識を継続できるようになれば、強豪の私学にも対抗できる」と語る。

日本高野連と朝日新聞社が全国の加盟校に行った5年に1度の高校野球実態調査によると、食事や栄養についてチームで指導していると答えた県内の学校は、回答が得られた86校の8割にあたる69校。「主に誰が指導していますか」という質問（複数回答可）には、「外部の栄養士」が17校、「外部のトレーナーやトレーニングコーチ」が15校、「食品会社スタッフ」が14校と、校外から講師を招くケースが目立った。

松本深志では2011年から、松本大学人間健康学部助手の管理栄養士、石沢美代子さんによる栄養サポートを通年で受けている。部員一人ひとりの理想とするプレーに適した目標体重を設定し、それに見合った食事のとり方を指導する。現在の2、3年生の部員は、昨年4月からの1年間で、平均体重が8・6キロ増加。今春の県大会では3位の好成績を収めた。

石沢さんの栄養指導は、球児たちの「その後」も見据えている。「進学や就職後に一人暮らしを始めてからも、自分で食生活を管理できるように」と、冬には調理実習を実施したり、夏の大会後の3年生には、引退して運動量が落ちた後に肥満にならないよう、摂取カロリーを制御することを呼び掛けたりしている。

「体重を管理することでパフォーマンスも上がるし、将来の健康にもつながる。そのことを、球児の皆さんには学んでほしい」と、石沢さんは話した。（大野択生）

管理栄養士が献立を考案した夕食を食べる部員ら＝4月20日、長野市の長野商

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

イマどき 高校野球

連合チームや他部から

3 部員不足

野球部員の減少傾向が続く高校野球界。9人の仲間をそろえるところから四苦八苦する球児たちは、支え合って、白球を追う。

長野大会開幕まで2週間となった土曜日。北部・坂城の連合チームは、軽井沢との練習試合に臨んだ。昨年の秋以降、3校は連合チームを組み公式戦に出続けた。この夏は、部員が集まった軽井沢が連合チームを離れ、2校で出場する。

試合では敵味方に分かれても、1年近くの間、練習を共にしてきた仲間だ。試合の前、連合チームを率いる北部の田中学歩監督が「一緒にやって、どれだけ成長したかみせてやろう」と選手を送り出した。

坂城の長野大会出場は、単独で出場した2015年以来3年ぶり。坂城の唯一の3年生、湯本哲平にとっては最初で最後の夏だ。

入学したばかりの16年春、部内でいじめが発覚し、春季大会出場を辞退。日本学生野球協会から半年間の対外試合禁止処分を受け、夏と秋の大会にも出場できなかった。

入学してから一度も公式戦に出られない中、仲間も次々と部を去り、気づくと男子部員は湯本だけになった。処分明け後も、部員不足で2年生の夏まで公式戦に出られず、モチベーションは下がった。グラウンドに顔を出す日は減り、髪を染めて友人と遊んだ。

転機は、昨年の秋。北部と軽井沢の3校連合チームを組み、公式戦に初めて出ることになった。自分以外は、全員他校の選手だ。練習で、年下の選手が強い打球を飛ばす姿を見て、ショックを受けた。「自分、めっちゃ下手くそだ」。再び野球熱に火がついた。

連合チームでの活動は、「普段他校の仲間と会えないぶん、より楽しい」という。「ここまで一緒にやってきたから、頑張りたい」

県高野連のまとめによると、今年度の県内の硬式野球部員数は、昨年度より245人少ない3114人。ここ10年間のピークだった15年度（3657人）から比べると、3年間で約15％減少した。加盟校数は前年度より2校減の87校。うち13校は、男子部員が1、2年生合わせて9人に満たず、3年生が引退した後の秋季大会への単独での出場が厳しい見込みという。

練習試合中の円陣で笑顔を見せる湯本哲平（右から2人目）と北部・坂城の選手ら＝6月下旬、坂城町

辰野の主将、上野龍輝（3年）は昨年秋、部存続の危機に頭を悩ませた。他の部員は1学年下の女子マネジャーだけだった。

苦しいときの上野にとっての支えが、2年生だった昨夏の記憶だった。昨夏の長野大会で、辰野は男子部員4人のほかに他の部などに入っていた3年生9人を集めて夏の大会に出場。全くの素人もいる中、初戦を突破した。「辰野の野球部を、自分の代でなくしたくない」。頑張れば報われると信じて、練習を続けた。

すると、かつて部を離れた同級生が「人数が足りないなら俺たちも行くよ」と大会の間だけ戻ってきてくれた。春になって新入部員も現れ、なんとか今年の長野大会にも出場できることになった。「支えてくれた人に感謝したい」

＝敬称略（大野択生）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

イマどき高校野球

幼少から楽しさを伝授

4 普及と育成

野球は園児のうちから――。野球関係者が本格的に園児らの指導に乗り出した。野球の楽しさを知ってもらい、選手に育ってほしいと、種をまく。

「トントン、シュッ！」「トントン、シュッ！」

松本市立庄内体育館のフロアで6月末、年長の保育園児たちの可愛らしい掛け声が響いていた。

「遊ボール」と名づけられた園児向け野球教室の一コマ。急速に進む子どもの野球離れ解消の一助になればと、松本市野球場のスタッフらが2016年度から取り組んできた。

本格的に組織化した今年度は、来年2月までに松本市内の15の保育園・幼稚園で計35回、園庭や体育館で予定している。各地区の硬式・軟式の少年野球チーム指導者や松本大学の野球部員も手ほどき役に加わる。

プロジェクトの代表で松本市野球場勤務の林謙一さん(64)は「野球というスポーツの楽しさを知る機会に恵まれない最近の子どもたちに、遊び感覚で面白さを体感してもらうのが狙いです」と話す。

その一例が「トントン、シュッ！」。投げるコツをつかむための仕組みだ。いざボールを手渡されても、投げ方のわからない子がほとんど。右利きなら、左足を前に踏み出すことから教える。ボールで後頭部を軽く「トントン」と2度たたいたリズムで「シュッ！」と投げる。基本動作の流れがのみ込みやすくなる。

最初は戸惑いがちな園児たちも、繰り返すうちに思い通りに投げられることがある。「やったあ」「すごい」と歓声が上がる。

教室は、気持ちよく体を動かすためのオリジナル体操で始まり、塁間を走る、ゴロを捕る、ティー打撃で打つ、と合わせて約1時間の設定だ。

林さんには近年、強い焦りがあった。プロサッカー松本山雅の人気沸騰で、かつては「松本のスポーツと言えば野球」といわれたほどの存在感が著しく低下していた。小中高校生の野球人口の減少傾向も、中信地区は北信と並んで減少率が高い。

園児向けの普及教室もサッカーの方が先行していた。「大幅に出遅れた野球ですが、競技への関心度で園児の時期からサッカーに大差をつけられる事態は改善したかった」と林さん。6月の県青少年野球協議会の役員会にも招かれて活動を報告した。

同協議会の山崎宏会長（県高野連会長）も、野球人口増に向けた取り組みの重要性を強調。園児向けの普及活動は今年度から小諸地域でも始まった。

しかし、野球界の課題とされて久しい統一育成システムの構築や、指導者の技能水準を明確にするライセンス制度に関する全国的な動きは、はかどっているとは言えない状況だ。プロ・アマ球界を統括している日本野球協議会は、今年度中を予定していたライセンス制度の策定を先送りした。

「長年の野球人気にあぐらをかいていたツケが回ってきている」と評される野球界。厳しい現実を抱える中での100回大会だ。

（山田雄一）

9分割されたストライク枠に向かってテニスボールを投げる保育園児＝松本市

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

イマどき 高校野球

面白さ知ったら夢中に

5 支え役

主役は選手たち。しかし、試合は審判がいなければ成り立たない。その素顔とは。

甲子園大会のプラカード担当から審判の道へ――。泰阜村の岡本伸さん(20)は今年度、県高校野球連盟の審判部員として新規登録された。飯田広域消防本部の阿南消防署で消防士を務める傍ら、公休や非番になると審判用具を抱えて試合に駆けつける。

「今でも、こうして高校野球に携わることができている。うれしいですね」。静かな口調に実感がこもる。

松商学園時代、選手での出場はかなわなかったが、甲子園の土を踏むことはできた。2015年春の選抜大会開会式で、母校のプラカードを掲げて入場行進を先導した。メンバー外の3年生のうち、仲間の投票で選ばれた。

高校時代の紅白戦や練習試合で、審判を交代で務めた。「これって、結構おもしろいな」。クロスプレーに自信を持って判定できたときの快感は格別だった。

就職1年目、たまたま知人と審判の話題になった。高校時代の経験を伝えると、「やってみないか」と勧められ、昨年度から飯田下伊那地区で試合会場へ。「今は快感どころか、緊張感と責任感でいっぱいです」。新規登録の100回大会は「じっくり勉強する機会にします」と言う。

県高野連の今年度の登録審判は145人。新規登録は岡本さんを含めて9人で、50代の1人を除くと10～30代だが、高橋京一審判部長(57)は「高齢化と、なり手不足が悩みの種です」と話す。

県内の高校野球で審判の定年は65歳だが、「球審は60歳まで」が目安。本業の都合に加え、社会人野球との兼務も多く、公式戦や練習試合で人繰りの調整は容易でない。

かつては「毎週末、出ろ」と求められ、やめてしまう若手も少なくなかった。「今の時代、そうはいかない。月に1、2度でもいいから続けてほしいと話しています」と高橋さん。

審判歴26年目の上田市の宮内一哉さん(43)は国際審判員の資格を持つ。県内で唯一、全国でも約40人という狭き門だ。「ジャッジの的確さは県内でトップ級」との定評があり、若手の目標になっている。

丸子実（現丸子修学館）の野球部時代は「下級生のころから審判に興味があった」。当時の山寺昭徳監督から「卒業後は審判になれ」と助言された通りにたどった。民間会社を経て、上田地域広域連合消防本部で救急救命士の職に就いてからも両立している。

「うまくやれて当たり前、ミスしたら批判の的」なのだが、宮内さんは「第三者の立場で試合を見てジャッジする魅力を野球経験者には気づいてほしい。面白さを知ったら夢中になります」と話し、後進の育成にも熱が入る。

26歳で審判になった高橋さんは「選手としてダメだった人が審判になる、と私も選手時代は思っていた」と苦笑しつつ、「瞬時の判断に神経を研ぎ澄ます。誇りの持てる役割です」と話す。

雨で8日に順延された開幕試合。松本市野球場で鈴木佳威球審(23)の右手が上がり、熱戦は火ぶたを切る。

（山田雄一）

＝おわり

審判用具の手入れに余念がない岡本伸さん＝泰阜村の自宅

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。